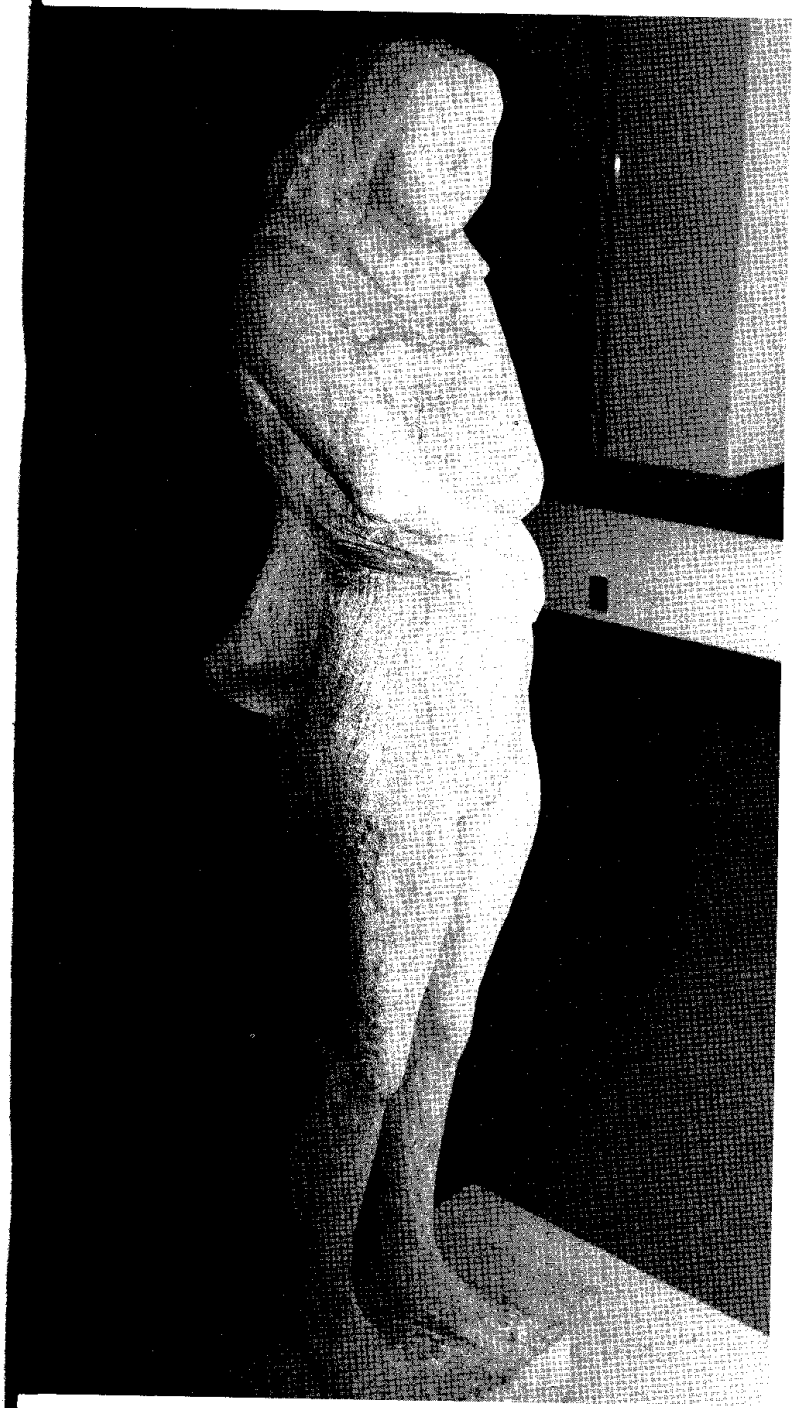
湖北を手づくりのメッカに

――手づくりを楽しむ人が集まって手づくりの楽しさを語る――



川崎佐玄さんの作品彫塑「想」

川崎 佐広

作陶二十六年。伊吹を望みながら田や畑を耕すかたわら、土を焼き、木を彫る。湖北の風土に根ざした代表的ホモファーベルのひとり。市展無鑑査

司会　わたしは四年ほど前に東京からやってきて、米原の山のなかにゲバントハウスというモノづくりたちの交流の場をつくりました。

湖北は東京からみると、水と空気がきれいで広くって、モノづくりにはとてもいい場所だと思うんですね。わたしの周りには、東京から引っ越してきた友だちがもう十人以上もいます。

みなさんも、同じモノづくりを楽しむ人たちですが、まずどんなモノをつくっていらっしゃるのか、お話を伺います。

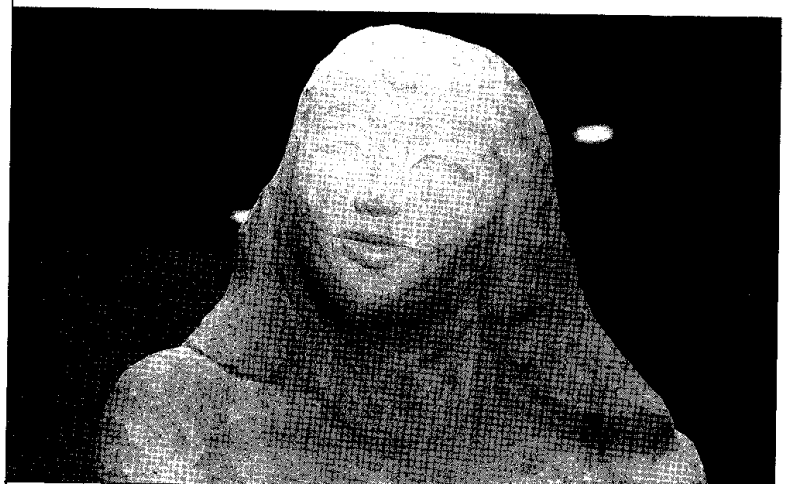
つくるたびに楽しさが倍々に

川崎　私は米づくりが専門なんです。農業をやっていますから、比較的自由な時間がもてるんです。それで、昔から木彫をやってきましたし、陶芸もやっています。そのほか、鉄や板金もいじっています。

時間に余裕があるので、使いやすいらしくて、長浜や近くの町の陶芸教室に引っ張りだされて、たくさんの人に陶芸を教えたりもしています。わたしはアマチュアですから、他の人から教えてもらったことは、他の人たちに教えて返すことで、モノづくりの輪を広げていきたいと願っているんです。

尾本　川崎先生の陶芸教室で、陶芸の楽しさを知ったひとりです。四年前から身の回りで使うお皿やコーヒーカップ、お茶わんなんかをつくっていますが、下手でも陶芸はすぐモノになって表れるでしょ。だから一個一個つくるごとに、楽しさが倍々になっていって、ほんとにつくっているときは無心になれますね。

的場　伊吹町には特産品といえるものがない



AINに集う仲間たち

木に新しい命を与えるのが仕事

木工作家 中島三郎

木にやさしい家具に惹かれた

中島さんは、ずいぶん無鉄砲な工芸家だ。東京から米原町に来るまで、滋賀県のこともゲバントハウスのことも、何も知らなかったという。

彼は二年前に東京から突然湖北にやってきて、米原町技折に住居を構えてしまった。茨城県で生まれて、育って、東京で絵を描いてきたから、関西のことはまったく知らない。どうして湖北に移り住むようになったのか、いろんな要因があったようだが、やはり彼に大きな刺激を与えたのは、ゲバントハウスの存在。

「知り合いの作家が、東京から湖北に引っ越しすることになってね、彼に連れられてふらっとゲバントハウスに来てみたの。そしたら、ゲバントハウスの森さんがつくった家具が、無造作に置いてあってね、天然の木の姿をそのまま生かした素朴な家具でね。僕には新鮮な驚きだったな」

確かに、木を切り刻んで、削って、磨いてそして塗料で仕上げたきれいな家具は、たくさんあるし、お金を出せばどこででも手に入る。しかし、森さんの家具は、木の性質を知り、生かすというだけでなく、木がつくり出した自然のデザインと人間の生活をうまく調和させて、木と人が仲よくしようという発想から生まれた家具だ。木が人のためにその素材を提供するのだから、人も木を切り刻んでむりやり人間の生活に合わせるのではなく、もう少し木の主張に合わせようと言う、そんな木に対するやさしい想いが表れている。

彼は、そんな森さんの作品に惹かれて、それまで東京で描いていた絵をスッパリとやめてしまった。東京から湖北へ移り住んだことも、絵をやめて木工を始めたことも、その要因は森さんの家具にあったようだ。

自然光がすばらしい湖北の家

「ここで果たして食べていけるかどうか、不安はあったけど、アルバイトでも何でもすればいいや、と思ってね。東京は家賃も何もかもが高くなりすぎて、僕らが住める場所がなくなってきていたし……。それと、絵を描くこと自体は、とても好きなんだけど、絵以外の人間関係が僕には合わないなあ、と思ったりしていたんでね。それで、東京を離れる潮時だと考えて湖北に移ってきたの」

彼はいま米原町技折に住んでいるが、今春同じ技折の借家に引っ越すまで、明治に建てられた藁葺民家に住んでいた。玄関は障子の引き戸がついていて、ダイドコは板張、土間にはおおきなオクドサンがあった。二階は蚕室に使われたと思われる間仕切りのない板張で、窓には障子戸がついていた。

朝、陽の光が障子を通して部屋のなかにさしこみ、夕方、太陽が西の空に沈むまで、家の中の雰囲気は刻々と変化していく。東京で暗やみのない生活に慣れてしまっていた彼にとって、古民家のなかで自然光がつくり出す光と影のハーモニーは、とても新鮮に映ったという。

「現代の家は、光と影で醸し出される微妙な味わいをなくしてしまった。家のなかから暗やみをなくすことが、合理的で文化的な生活だと信じてきた。光と影の美しさが、日本の建築文化の粋だったんだけどね。枝折の民家には、日本の建築文化がまだ生きていると思ったね」

彼の父親は、茨城県の田舎で大工をやっている。大工の息子だから、建物のことについては詳しい。

「上壁の塗り方にしても、木組にしても、湖北の民家の建て方は、伝統的な技術をしっかり受け継いでいると思うね。瓦の葺替もていねいだし、紅殻塗りも残っているしね」

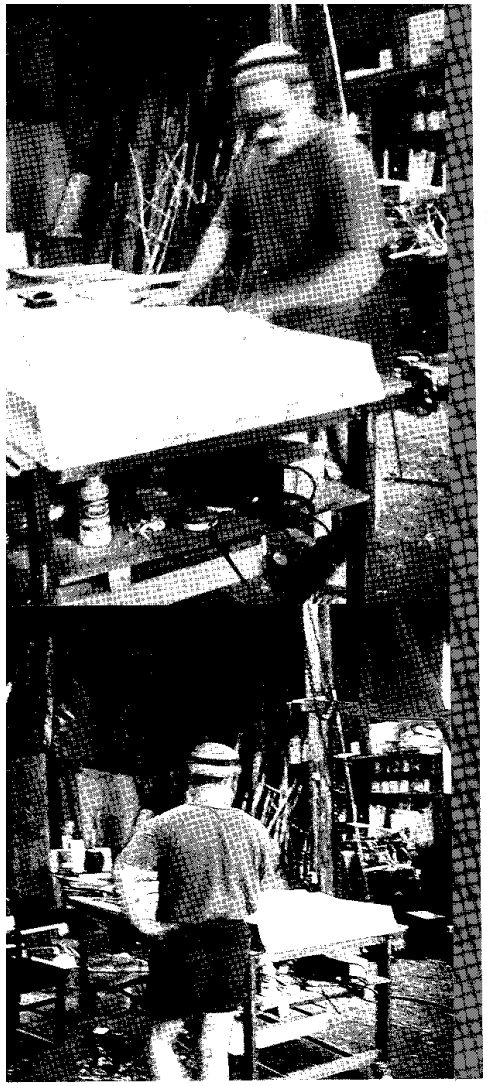
木は何度でも生き返らせる

いまは、みんなが木をたいせつにしようなどといいながら木をぜいたくに使いすぎている。東京の家など、数十年ももたない。家具だって同じだ。いいものを長く使い込んでこそ、木の味わいが生まれてくるのだ。

「木は何度でも生き返らせるんだ。廃材と思われるものでも、削って磨けば、おもしろい作品ができる。死んだ木に再び命を与えることができるんだね。これが僕の仕事だと思うんだ」

彼は、長く絵を描いてきたから、木工でも象形的な作品をつくっていきたいという。家具は、用の部分で制約されることが多いし、材料の質が重要視される。だから、自分のイメージを自由に表現できる作品に、強く惹かれるという。

湖北のどこかの街角やお店のなかでも、彼が命を吹き込んで、生まれ変わった木の造形に出会えるかもしれない。

中島三男　プロフィール

茨城県生まれ、三十七歳。
東京で、自由美術家協会に所属し、アクリル絵画を描いていたが、湖北に惹かれて昭和六十三年七月、米原町技折に移住。
趣味は野菜作りと園芸。